

## おとうさんのかたぐるま 自分の言葉

5年ほど前に当会報に「自分の言葉」というタイトルで言葉の話を書いたことがあります。そして先日、息子と同世代の若者と話をしたとき、もう一度同じタイトルで文章を書かなければと感じました。つまり、若い人たちに日本語理解力が落ちてきていることを感じたからです。「やべ〜」「すげ〜」「まじっすか」などの言葉で会話を進めてしまう人たち。そのような日本語でどのように思考をするのか、実際に見てみたいと思っています。そして言葉の大切さをもう一度、「幼児と言葉」について私の考えを書いてみたいと思います。

子どもが生まれ、それから一番身近な大人である母親から愛情をたっぷりと受けて子どもは発育を始めます。そして母親からの一方的な話しかけや絵本などの読み聞かせが子どもの言葉の成長を促していきます。一般的に2歳児ころに一人遊びを始めたり、一人言を言い始めたりします。この時期の子どもは自分を耕している状態だといわれています。そしてその耕し時期が終わる3〜4歳児に言葉を身に付ける資質が開花し、母語を本格的に身に付けていきます。つまり幼児期は母語を育んだり学習したりするのに適した年齢といえます。そしてその好機を逃してしまうと、母語の習得と回復に非常に大きな努力が必要となります。また幼児期に言葉はコミュニケーションの道具から思考の道具へと変化する大切な時期で、母語を使って物事を考える力をつけ初めて行きます。以前は「幼児は環境に慣れやすく、幼児期に母語以外の言語の環境に入れると驚くほど早くその言語を習得できる」という点から海外で生活する機会に現地の幼稚園で違う言葉を習得するチャンスだとの意見が多く見受けられました。幼児には言語を習得する資質があると言われていますが、それはある特定の言語を習得するものではなく、自分の周りで話されている言語を学ぶ資質だそうです。つまり親の話している言語と違っていることもありうるということです。親と異なった言語環境に幼児を入れますと、親とは違った言語でものを考えようとし始めます。そしてここ数年の間に「まず母語の習得が大切だ」とする意見が増えてきました。では一体母語とは何なのでしょう。それはその人間が最も得意な言語だと思います。いつも人間はその言語（母語）を使って思考し、コミュニケーションを取っています。そして母語で書かれた文章を読む時には、その行間までが読み取れるだけの理解力を持つことができます。つまり人間の思考力は母語をどこまで体得しているかがかぎになるといわれています。

最近、日本の幼稚園で友達とコミュニケーションがうまく取れない、大人との会話ができない、3歳前途になっても単語だけまたは簡単な日常会話だけしか話せない子どもが増えてきていると言われます。その原因の一つに早期教育の情報が多く、親子のかかわりや遊びこみの代わりに2〜3歳ころからお稽古事やドリルなどを与えられる「受動的な生活」となり人々との愛着関係を十分に築いていない幼児が増えたことも関係しているといわれています。また5歳児頃になると文字を覚えさせようとする親が増えますが、つくば言語技術研究所の三森所長によると「そんなに早く文字を覚えるより、聞いたお話を自分の言葉で親などに伝えることができる方が大切である」とのことです。やはり物を与えるだけでなく、幼児期には人とのふれあいを大切にすることが必要かと思えます。

私たちの幼稚園はみんなおしゃべりです。3歳児の中には言葉の発音が不明瞭な演じもありましたが、お友達と言葉をたくさん交わす中で自分の発音が少し違うことに気づき、お友達の発音を真似することで発音が良くなっていったケースもありました。もともと子ども達はおしゃべりです。自分の気持ちを感じて欲しい、分かって欲しい、もっとかまって欲しいと子ども達は自分の心を何とかして伝えようとします。そのときに母語力が低ければ他人に正確に表現することができなくなります。そして母語を習得するのに難しい環境下で長い間子どもを置いておくと、言葉が思考の道具にならず、自分の考えを正しく伝えることができなくなってしまう可能性があります。

今の子どもたちにとって大切なのは人間と触れ合うことです。そして正しい母語を習得することです。正しく人とふれあい、正しい言葉を習得することで、その子どもの未来が大きく変わっていくと思います。毎日の子どもとの会話を大切に、そして子どもがいることの幸せを感じて、大人は毎日を過ごしていきたいものだと思います。そして社会人としても正しい日本語での表現ができるように、日本語での教育を共に充実する努力

を続けたいと思っています。